

# 第5章

# 開館40周年記念

# シンポジウム





## 福生市公民館開館40周年記念シンポジウム

公民館のこれまでとこれから  
～参加と協働の多様性をめざして～



日 時 平成30（2018）年1月28日（日） 午前10時～午後0時30分

場 所 福生市民会館小ホール（つつじホール）

コーディネーター （敬称略）

伊 東 静 一（東京学芸大学非常勤講師・元公民館長）

パネリスト （50音順敬称略）

加 藤 孝 子（公民館利用者・福生市教育委員）

野 澤 久 人（前福生市長、初代公民館長）

野 村 亮 （NPO法人自然環境アカデミー事務局長・福生市社会教育委員の会議議長）

山 西 年 男（公民館利用者・公民館運営審議会委員長）

司 会 小 澤 はる奈（公民館運営審議会委員）

**小澤** それではこれより、福生市公民館開館40周年記念シンポジウムを開始させていただきます。

福生市公民館は、昭和52年の開館以来、40年の歴史を刻んできました。この間、公民館を拠点に豊かな学習、文化活動が展開され、多くの市民が地域で活躍されています。

シンポジウムでは、これまでの公民館の歩みを振り返りつつ、更なる発展のための方向性を考え合っていきます。皆さんの活動の中で困っていることや、ステップアップしていただくためのヒントとしていただければと考えております。

では、シンポジウムの登壇者をご紹介します。コーディネーターの伊東静一様。続いてパネリストの皆様です。野澤久人様、加藤孝子様、野村亮様、山西年男様です。本日はどうぞよろしく願いいたします。なお、プロフィールにつきましては、お手元のプログラムをご覧ください。

それでは、大変お待たせしました。ここで進行をコーディネーターの伊東静一様と代わります。

伊東様よろしく願いいたします。

**伊東** それでは改めまして、本日はお運びいただき



まして、本当にありがとうございます。会場を見回しますと、顔なじみの方もたくさんおいでいただきまして、私も少し安心したり、

逆に緊張したりもしております。今日はシンポジウムということですが、打ち合わせの段階では、笑いが出るような、そのような機会にしようではないかということになっていますので、皆さんもリラックスして聞いていただければと思います。

本日の進め方を少し説明します。

まず、パネラーの方々に簡単に自己紹介をしていただきます。その後、お一人10分程度でこれまでの取り組みの中から、どんなことを感じているか、どんなことが問題なのかということをお話し

ただく予定です。

その後、今までの公民館の活動や成果、課題といったものが出たとすれば、それを今後どうしていったらいいだろうかという話を皆さんから出していただきたいと考えています。

このシンポジウムの趣旨等はご配布のプログラムに書いてありますので、ご覧いただければと思います。その中にパネリストのプロフィールが記載されていますが、簡単に申しますと、公民館設立に際して奔走された野澤さん、子ども時代から公民館活動に参加され、今では公民館事業を支援する立場の野村さん、ご自身のお子さんを公民館保育室に預けて公民館での学びを深めた加藤さん、そして男声コーラスのメンバーの一員でもあり、公民館運営審議会の委員としても活躍されている山西さんの参加により、具体的な話題、具体的な事例を通して、福生市の公民館活動の過去から現在、そして将来について話し合うということになっております。

パネリストの事例から、皆さんのこれからの取り組みへのヒントになることが出てくると思います。ぜひ、それを持ち帰っていただきたいと思えます。

それでは座らせていただき、話を進めたいと思います。さっそく、野澤さんから自己紹介をお願いいたします。

**野澤** あまり時間が取れないだろうと思いますので、資料をいくつか用意しました。それを見ていただきながらお話したいと思えます。



まず、私自身のことを最初にちょっとだけお話しします。

1962(昭和37)年に、福生に来ることになりました。ちょうど66年くらい経ちましょうか。なん

で福生に来たのかという話をよくされます。私は大学で社会教育主事の資格を取りました。大学時代から青年学級生の大会の面倒を見たり、青年団全国大会のお手伝いに行ったりというようなことをやっていました。そんなことから、当時、福生町の教育長をやられていた橋本兵五郎さんという方が、私が住んでおりました長野県の信濃寮にわざわざお見えくださり、どうしても福生に来いというお話をいただきました。

たまたま1959(昭和34)年に社会教育法の一部改正があり、市町村に社会教育主事が必置になりました。今までは任意でしたが、必ず置かなくてはならないことになり、そのことからお見えになったわけです。

私が福生というまちにご縁ができ、福生に来ることになった一番最初の話として紹介させていただきました。

**伊東** ありがとうございます。野澤さんは1962年、昭和37年に福生に来られたということですが、私が野澤さんとお会いしたのは18歳の頃です。鮮明に覚えているのは、16mm映写機の操作講習会に参加した時の講師が野澤さんでした。それからもう47年くらいのお付き合いということになるかと思っています。

野澤さんがいなければ、福生の社会教育は始まらなかったということです。この内容については、後ほどお願いします。

次に加藤さんに自己紹介をお願いします。

**加藤** 普段は本館で混声合唱「コール福生21」というコーラスのサークルで活動しています。昨年、松林分館で主催事業として行われました「寿生きがいひろば」の大人のぬり絵講座に参加しまして、思いがけず自主サークル化され、1月に2回、初めての自分たちの活動



を行ったところです。

最初、ぬり絵というと、子どもの頃、おばあちゃんに買ってもらった「きいちのぬりえ」みたいなことをすればいいのかと思って参加しましたが、とんでもない。大人のぬり絵はすごくハードルが高くてどうしようかと思ったほどです。講座終了後、今後の自分の10年を考えると、ちょうどいい脳活になるかと思い、自主サークルに参加させていただくことになりました。

先ほど、伊東さんからもお話がありましたが、私の公民館活動の始まりは、長男が1歳になったとき、幼児室が付いている白梅分館で行われた講座に参加することから始まりました。今、お話を伺うと、昭和52年に公民館が開館したということなので、昭和55年生まれの子どもが1歳になったときですから、「私は結構早くから公民館活動をしていたんだ」とちょっと嬉しくなったり、自分の年を逆に感じたりしているところです。

初めての子育てに不安を持つお母さんたちと悩みを語り合い、非常にいい友人ができました。その後ずっとお会いしてなかったのですが、6、7年前でしょうか、急に「会わない？」ということになり、そのときに講座を持ってくださった職員さんも一緒に昼食会をして、おしゃべりに花を咲かせることができました。それも、公民館で活動したからで、だからこそできることではないかと思っています。

私の公民館活動はこのように、子どもたちの成長とともに進んできたという感じで、長男が幼稚園に入園したと同時に、公民館から少し離れ、幼稚園の母の会や学校のPTA、少年野球の追っかけお母さんという所に行っていて、その途中で「コーラス、今、人がいないんだけどやらない？」と言われて、「そんな時間無い。私、今、野球の追っかけで忙しいから」とお断りしていました。

その後、次男が大学入学と同時に野球部の寮に入り、それをきっかけとして、「さあ、これからが

私の時代、時間」ということで、「コーラス、誘われたときが花よね」と、コーラスのグループに参加することになり現在に至っています。

私はサークルの仲間が大好きで、指導して下さる先生にぞっこん惚れ込んでいて、この活動はやめられないと思っています。音痴な分はちょっと苦勞ではありますが、私が今、コーラスにいるのは、歌をうたうよりも、皆さんのお世話をしたり、マネジメントというか、利用者連絡会に出たり、皆さんに「今月の練習はいつです」というようなお便りを作ったり、ということに生きがいを感じていて、歌うのは二の次でコーラス活動を楽しんでいる現状です。

**伊東** ありがとうございます。それでは次に、野村さんに自己紹介をお願いします。

**野村** 自然環境アカデ

ミーという福生市内に拠点を置くNPO法人で事務局長をしております。自然や環境、環境教育などを扱っているNPO法人です。自然環境アカデミーは、17年前、2001年に、当時公民館の利用サークル「福生自然観察グループ」のメンバーが中心となって設立されたNPOです。

多摩地区を中心に環境教育を推進しています。

私は昭和43年、福生市に生まれ、福生育ちです。一時期、福生をちょっと離れて仕事をしていた時期もあるのですが、現在も福生に住んでおり、福生で子育てをしている真っ最中です。

私は小学生のときに、初めて公民館事業に参加したことをきっかけに公民館活動が始まりました。この公民館ができた昭和52年以來のお付き合いということのようです。

現在はこのNPO法人の自然環境アカデミーの事務局長をしながら、公民館の事業も一緒にやっておりますし、それ以外にも、福生ボランティア市



民活動センターの運営委員、社会教育委員、文化財保護審議会委員を仰せつかって、いろいろと市の事業に対して協力をさせていただいているところです。公民館での実際の事業のつながりについては後段の方でお話をさせていただきます。

**伊東** ありがとうございます。開館以来、公民館利用者であって、今では公民館事業を支えるような立場にもなっているということから、後ほどいろいろなお話が出てくるのではないかと思います。それでは次に山西さんお願いします。

**山西** 私も公民館の利用者で、男声コーラス「ブリランテ」というサークルに所属し、日頃、歌をうたっております。もともと音痴なのですが、いろいろ仲間が楽しいので続けているところです。



最初に私と公民館との関わりをご紹介します。(壇上から冊子を提示) すみません、こんな大きな会場で見えづらいと思うのですが、講座でこの小冊子を作ったのです。その講座は「福生探索マップづくり、野鳥編」というものです。

「野鳥の目から見た、福生七景」というタイトルで、当時参加した10人のメンバーと、ほぼ半年くらいかけて作り上げました。これが公民館との初めての関わりでした。

講座というのは、言うならハウツーものを教えてくれるのかなと思って安直に考えていました。ところがそうではありませんでした。当時のこの講座の講師は私の右隣に座っている野村さんでした。

野村さんからどうやって作るのか教わるのかと思っていましたら、10人に向かって、「勝手に考えろ」と言うのです。私も度肝を抜かれ「ちょっと待ってよ。どうやってやったらいいかわからないよ。勝手に考えろって、どういうこっちゃろ

な？」と思いましたが、仕方なく10人がボツボツと話をし始めました。

実はこれが良かったのだらうと思うのです。自分たちでこのタイトルを考え出し、自分たちでまちに出てスケッチをし、当然のことながら、自分たちで文章を書くわけです。そんな、すべてを自分たちでやる講座でした。一切合切を作り上げて冊子ができました。みんな自分たちで考えてやりました。すごい達成感を感じました。講座って、こんなにすごいものなのかというふうに、自ら思ったというところです。

私は20年前に福生に引っ越して来ました。それから4年後、16年前この講座に出会いました。4年くらい経っているので、当時、少しは福生のことがわかっていたのかなと思っていましたが、実はあまりわかっていなかったのです。だけど、この冊子を作るためにまちを歩くということをやりましたら、福生のことが徐々にわかってきました。自分で作ったものに、自分が勇気づけられたという形でした。

その後、10年前に合唱の講座がありました。男ばかり集めてやる男声コーラスの講座です。講師は亡くなった高橋逸子先生でした。その講座がサークルに昇華して、今の男声コーラス「ブリランテ」になりました。

公民館には交流の場、つどいやまつり、研修会など、いろいろなものがあります。そういうものにも7年前から参加するようになり、いろいろと公民館の運営というようなことがちよつとずつわかってきました。3年前に、本館の「利用者連絡会」から推薦を受け、現在、福生市公民館運営審議会の委員をやっています。

冒頭で申し上げましたように、歌はとても楽しいです。楽しいのですが、やはり最近いろいろなことを見聞きますと、サークルで楽しんでばかりでいいのかな？ と少し思いが変わって来ています。その辺の所を、後のテーマの所でお話して

きたらと思っています。

**伊東** ありがとうございます。お三方の自己紹介が終わりました。この後、皆さんから実践を語っていただきますが、その前に野澤さんから公民館を設置するに至るまで、要するに開館までの取り組み、約15年間の取り組みを、少し資料とともにお話いただこうと思っています。

このことは今日、市議会議長や教育長、市長からお話がありましたように、市民が参加して作り上げた公民館ですが、職員としての野澤さん、市議会や市の職員の方々の協力があったわけです。そのつくる過程で行政側にいた野澤さんからお話をいただこうと思います。

もちろんこれは忘れてはならないのですが、ロビーに資料展示がありますように、今日おいでになっている村野さんを中心に、「ふつき公民館を創る市民の会」が、大変大きな役割を果たしたということもございます。その辺りのことも、野澤さんが当事者として関わっていただいたわけなので、少しお話いただけたらと思います。野澤さん、よろしく願いいたします。

**野澤** だいぶ前の話です。私が福生に来た2年後、昭和39年(1964年)に石川常太郎さんが町長になられます。

その前の代の町長が庁舎を造りました。今の庁舎ではなく前庁舎です。当時、市全体の予算が30億円いかない時代です。金が無いのに借金していろいろなものを造っていきました。その結果、借金をし過ぎてどうにも立ち行かない町になってしまいました。それを建て直すために、石川常太郎さんが請われて町長になりました。とにかくなんとかしなければならぬ、立て直す手法として、次の年、地方財政再建特別措置法の適用を受け、昭和40年から44年をめどにそのような状況を改善する計画を立てました。法律をもって、国に管理をされて自治をする。自治をするといっても、自治は全く無いわけです。そのため町全体が一丸

となってその問題に取り組み、2年間で財政再建を達成しました。この一致団結した力、その中心になっていた石川常太郎さんの力量、そういったものの凄さを私は感じますし、それからそのときに、こうしなかったら福生はちゃんとしていけないという、その意気込みというのを、私は感じていました。そういう時代がございました。

そのときが一つの福生市の転機であったのだろうというふうに思います。

もう一つ、「人」の話をいくつかしておきます。後に都議会議員となる田村利一さんが当時、教育委員長でした。それから、私が入ったときですが石川常太郎さんが教育委員でした。社会教育委員と体育指導委員の制度を作っていたので、社会教育委員には石川慶一郎さん、私の前の市長ですが、この方が青年団を代表して出ておりました。それから平井さんや赤尾先生、そして、もう一人忘れてはならない方が山崎茂男さんというそろばん学校の先生です。この方が、私に来る前から文化祭を自分たちで始めてくださっていた。そういう人たちです。そう見ますと、ほとんどがみんな自分たちで社会教育活動を進めていくという形で動いていらっやいました。そういう方々が大変たくさんいて、しかも有力な、町を動かす力になっていました。

ですから私に来たときから何年かは、その方々のお話を聞くことだけが勉強、仕事みたいなものでした。皆さんに育てられながら今日まで来ているということです。

その後、プールを造りましょうという話で、町営(当時)プールを作ります。昭和43年ですから、1968年でしょうか。50mのプールを一番初めに作り、その後、幼児用プール、25mのプールができて現在の形になっているわけです。私が福生に来たから一番最初にできた社会教育の施設です。それ以外はなんにもない町でした。

資料に書いておきましたが、町立の牛浜野球場

というのがあり、これだけが唯一の社会教育施設でした。西多摩自治会館がありましたが、それは西多摩の郡が造った施設です。それから郡の婦人会館が牛浜にありました。これは民間の連合会が西多摩全体でつくっていました。私の生まれた町は、小さい町ですが、図書館や公民館もありました。昭和24年、社会教育法が成立しますが、公民館はその社会教育法の中に位置づいている社会教育機関です。施設があつて人がいて機能を果たす。機能というのは、教育機能という意味です。そういうことができる場所という意味では学校と同じです。図書館もそうです。そう捉えていただくといい。図書館とか博物館とか体育館というのは、みんなそれ以後、社会教育法から派生した特別法ということになります。そういう中で、3万人市制が行われます。

この3万人市制とは何かというと、町ではとにかく何もできない。町だと郡があり、郡は東京都が管轄をして、その中で行政権限がものすごく少なくなっています。市になれば非常にたくさんの権限を持ち、自分たちでできる。いわゆる自治ができるということから、どうしても3万人市制をやらなければ、と全国の同様な状況をかかえている町とともに地方自治法の一部改正を時限立法でやりました。その中心になったのが石川常太郎さんです。とにかく役場には全くいなかったと言われるくらい都内に行っているような活動をされ、3万人市制を実現しました。(石川常太郎著『回想』参照)

1970年に市制を敷きますが、施設はとにかく何にもない。とりあえず、福社会館くらいは造らなければということで、福社会館(現さくら会館)を造る。それが市制記念として一番最初に建設されたものです。

その前から私自身も直接、石川常太郎さんから言われましたが「野澤さん、都市基盤整備が絶対大事で下水道をどうしてもやりたい。それが終わ

ったら社会教育の施設を造っていくという順番でやらせてほしい」と。ですから、市民会館公民館が昭和52年にできるまでに15年かかっています。

福祉会館ができ、昭和48年に市民体育館を造るわけですが、その中に図書館が入っていたり、会議室や視聴覚室を造ったりしました。

私は今のような形で施設ができるとは思っていませんでした。人というのは、本を読んでいる時もあり、しゃべっている時もあり、それからスポーツで体を動かしている時もあるので一人ひとりを分断しないでいいだろうと。トータルな人間として、その人が活動できるような場所を造ればいいだろう、という考え方を一番最初に持っていたのです。

3万人市制をやった後、もう一つ大きな仕事として出てきたのがKPCP（関東平野空軍施設整備統合計画）です。1973年のことですが、関東地区にあります米軍施設、その機能を全部、横田基地に集約しようという話が出てまいりました。「国が言うことだから仕方がない」、石川常太郎さんが苦渋の決断をしたと、ご自分の著書に回想として書いておられます。（前出参照）

ということで、これは国で決めたことなので、一定の形で協力せざるを得ないという中で、それでは見返りは？ という話をするのです。先ほど申し上げた一般会計30億円くらいの予算のときに、これから福生市がいろいろなものを整備するためには380億円のお金が必要になるのだと、いろいろ数字を出させていただいて、まとめたものを持って行かれました。

この小ホールというのは公民館なのです。大ホールは特別集会所という位置付けですが、ほかの部分は福祉施設と公民館という施設の補助金を全部、合算した施設です。

余計な話をして時間がかかりました。いずれにいたしましても、そういう思いを込めてやってくださったことが基盤となって、下水道の整備が進

み、体育館、図書館、公民館が整備されていきます。図書館は団体がいくつもあり、図書の問題は非常に分かりやすい。一番わかりづらいのが公民館です。全国的には、昭和24年くらいの段階でほとんどと言っていいほどの市町村に公民館は造られるのです。ところが、東京は非常に遅れていました。西多摩の中では、日の出とあきる野、瑞穂にはありましたけれども、単なる施設、ホールでした。

そういうことで非常に施設整備が遅れているまち、地域ですから、順番で造ればいいだろうと、体育館であり、図書館であり、最後にやればいいのかは公民館だろうと。それは公民館というものを理解していただく、あるいは社会教育そのものを理解していただく時間というものが必要だということで、いろいろなことをやらせていただきました。スポーツ教室もやりましたし、それからできたサークルがみんなだいたい体育協会という組織で当時は、3団体しかなかったです。それは体育指導委員の先生がやっています。

それから、図書館の問題について言えば、都の移動図書館があり、それを基にした鍋ヶ谷戸読書会など、図書をもとにした学習活動を福生二小の先生方と連携した活動といったものが図書館をつくるきっかけになっています。

では公民館は、というと先ほど話が出ておりました「ふっさ公民館を創る市民の会」という形に最終的にはなります。

成人式のつどいを昭和40年に始めます。その時にアンケートを取りましたら、青年たちが一緒に活動したい、当時、集団就職の人が非常に多くいましたから、そうした青年たちがみんなで何かをやろうということから、一番最初にできたのが「つくしの会」という会です。それから「さんしょうの会」、そのほかに、サークルとしては「吹奏楽愛好会」、「フォークダンス」もです。そこで、そういう人たちに一緒にやったら？ というところで

できたのが、青年団体連絡協議会です。これは後に公民館職員となる松坂君がつくしの会のメンバーであり一生懸命いろいろやって行きます。

その後、今度は勉強を始められます。たまたま奥田泰弘さんという私の大学の先輩がおられまして、この方が後に公民館学会という学会をつくるのですが、彼が一生懸命、いろいろ指導してくれました。それからうちの方で言えば、加藤君、松坂君というような人。それから一番忘れてならないのが、この全体の「創る会」の中心になってくださった村野君です。ロビーに彼からもらった資料を展示していますので、後ほど見ていただくとよろしいと思います。

私は行政の側にいましたので、署名その他の苦勞を知りませんが、大変な苦勞をして、署名を集めて、その上でいくつもの非難を受けながら市議会に陳情をし、請願を出していく。そういう中で市民の人たちと一体感を作っていく。文化協会も婦人の各種団体も関わってやってくれています。その中心になったのが青年団体連絡協議会です。その方たちが公民館を創っていく中心になってくれました。

どんなふうにかつたか、どんなふうな形で創られていったかについては、昭和52年版の『会館紀要』に書いてあります。

時間が来てしまったので、ここまでにさせていただきますが、足りない所は後ほどの話の中で補っていこうと思います。また先ほど申し上げましたが資料がロビーに展示されていますし公民館資料室にもあると思いますので、読み返しながらかつころの話の思い返しただけで大変うれしく思います。一生懸命活動をした素晴らしい人たちがいて、その人たちの思いがこもって創り上げられた、市民会館と公民館であると思っております。

どんな役割を、何を期待して創ったかとかいうこともお話ししなくてははいけないのですが時間が

ありません。

市になったこと、金が使えようになったということがあります。それから、当時、全体的に言えば都市化が非常に進んでいた高度成長の時代です。2万2千人の町が5万人の人口になっていくわけですから、当然のこととしていろいろな人たちが入ってきて、いろいろな形で活動をしていく、一緒にやっへ行こうという形になっていかざるを得ないということです。それが一つ。また市民意識もそういう状況を背景にして変化していき、どんどん人間関係が無くなってきます。町会で言えば、昔は全員加入でした。婦人会も青年団もそうでした。ところがもうそれは完全にズタズタになって無くなっていきます。それからもう一つ大きいのはコミュニケーションの過程だと思います。昔は親とか先生の言うことは、絶対的だったので、マスメディアが発達すると、それからさまざまなコミュニケーション手段が出て来ます。ですから、そういう時代を背景にして作られているということ、少し付け加えておきます。

**伊東** ありがとうございます。公民館は昭和37年に野澤さんが来られてから15年間にわたって、市内の文化協会や体育協会、それから市民の皆さんと共に創ってきたという経緯があるという説明でした。実は私自身も、署名活動に参加した一人です。「公民館ってなんだ?」、「市民会館とどう違うの?」という説明を求められても答えられなかったという経験が若い私にありました。

そういう経験の中で、村野さんを中心に青年団体が中心になって、学習を積み重ねて、やはり課題、それからどういう問題を、どう展開していくべきなのかということやずいぶん議論した記憶があります。そういう中で女性団体、体育協会、文化協会などとの合意を形成するという取り組みが随分されました。その合意を形成した上で、請願という、早く言えば政治行動に出たわけです。学習が政治的な行動に移る過程ではどうしても合意

形成という学習過程が必要です。

それが福生の場合は、野澤さんが公の立場にいながら指導をしていただいたということもあり、議会、それから福生市、それぞれの団体と合意をして作ってきたという経緯があります。そういう経緯の中で作られた公民館なのですが、そこで活動を始めてきた野村さん、加藤さん、山西さんにどういう活動をしてきたかをお話いただければと思います。

それでは野村さんから、子どもの頃から公民館事業に参加して今日までの流れや思いなどをお話いただければと思います。よろしく願いいたします。

**野村** 今、野澤さんのお話をうかがっていて、「ああ、そんな事があったんだな」ということを改めて感じました。私は昭和43年生まれですから、プールができたり、体育館ができたり、公民館もそうですけど、そういう施設が造られようとしていたときには、子どもだったので知る由もないですが、当時、青年だった伊東静一さんや野澤さんがご尽力いただいたことで、私が参加することになった公民館ができたという話をうかがい、改めて本当に感謝し、思いを新たにしましたところ。

その当時の私のことをちょっとお話しさせていただきます。先ほど福生で生まれ育ったとお話ししました。福生第五小学校という市立の小学校に入りました。この小学校は「愛鳥モデル校」という、鳥を愛する取り組みを当時からしていた学校でした。今でも行われていますが、全校野鳥観察会というものが年に2回あります。先日も伊東さんと一緒にその指導に行きました。

小学校1年の時、全校児童が一斉に先生と一緒に多摩川に出て野鳥の観察をします。私は当時、スズメとか鳩とかカラスとかいう鳥の名前しか分からなかったわけですが、多摩川に出たら数十種類の鳥がいるのです。とっても綺麗な鳥もいます。当時は多摩川にカモがたくさんいました。マガモ

という頭が緑色のきれいな鳥です。この鳥を見て、「自分の住んでいる近くに、こんなきれいな鳥がいるんだ」と、非常に感動した覚えがあります。それ以来、もうすっかり鳥好きになり、学校での観察会以外にも、公民館の主催する野鳥観察会に参加をすることになるわけです。

公民館の野鳥観察会に参加したところ、地域に鳥のことに詳しい大人の方や先生がたくさんいらっしゃるということを知ります。ここには小学校の先生で、観察会の講師もされていた方や高校の先生だけれど、地元では野鳥観察の講師をされている方、それから、普段は大学で教鞭をとられている大学教授で、植物の専門の先生が講師として観察会で、小学生から大人の方までの参加者に対して、自然のこと、野鳥や植物のこと、環境のことをいろいろ話して、教えてくださる、そういう講座があったわけです。

そこに参加をして、小学校では鳥の名前を教わったりするだけだったのが、学校では教えてもらえないことをたくさんの方から教えていただいた。これは少年野村亮にとって、ものすごく楽しいことで、次の年も楽しみに参加したわけです。

そうしたら、そこにいた大人の一人から、「野村君は、去年もこれ、出ていたよね？我々は福生で自然を観察するグループを作ってるんだけど、そこに一緒に来ないかい？」と言われたのです。この誘った人が、伊東さんでした。そして、楽しくてしょうがなかったので、「公民館事業以外にも、そういった観察をする場に連れて行ってもらえるんだったら、ぜひお願いします」と。富士山の麓に連れて行ってもらったり、奥多摩の山に連れて行ってもらったり、自然や野鳥のことについて学びを深めていきます。

そして、地域の福生自然観察グループという公民館の利用サークルの一員として、当時は小学生でしたので、“おみそ”みたいに、大人の活動の中

に入って、仲間の小学生、中学生もたくさん参加をしていました。本当に子どもから大人までが一つのグループ、サークルに入って学びを進めていくという中の一員として参加をさせていただいたということです。実はここで一緒に小学生仲間の一人として参加をしていたのが現公民館長で、当時から一緒にいろいろと観察をしていた仲間です。そこから福生自然観察グループ、また、伊東さんが公民館の職員として野外体験や自然の事を学ぶ講座をやっていただきましたので、毎年いろいろな講座に参加して、サークルとしても公民館を利用していましたし、講座の参加者としても公民館を利用しています。

子どもの頃から、公民館を通じて、地域の自然や野鳥のことをずっと勉強させていただきました。

その後、年月が経過し、当時、小学生だった子どもたちがみんな大人となって、阪神淡路大震災があったり、利用活動が盛んになったりしてくる。そういうような状況の中で、我々もただ好きな事をして、趣味の会をやっているだけではなく、NPO を立ち上げて、地域社会に何か貢献できるようなことをやっていかないか？ という動きがグループの中で出て、NPO の設立に至ったわけです。

2001年に、環境教育を目的としたNPOを創るわけですが、NPOを創るというのは、当時のそのサークル活動をやっていた中では、かなりハードルの高いことでした。これをなんとか乗り越えようと地域のサークルのメンバーやいろいろな方に関わっていただいて、NPOを設立し、活動します。先ほど、山西さんからありましたが、NPOとして活動を始めた当初に公民館から協働で講座をやりたいと持ちかけてくれた職員、これが今の館長の佐藤さんですけれども、佐藤さんが職員で、この『野鳥の目から見た福生七景』、野鳥マップ作りの講座です。

それを皮切りに、公民館の講座や福生市の環境課と一緒に環境教育を進める「水辺の楽校」、環境

フェスティバル、市民環境大学といった事業をやっているところです。これは公民館の社会教育というだけではなく、福生市の他の部署でも我々のNPOと協働して、社会教育的な事業を何かやっていけないかと持ちかけたり、市からもいろいろと持ちかけられたりして、今では一緒になってそういうことを取り組んでいるということです。

最近では公民館の「夏休み自然体験教室」に10年ぐらい関わり、福生の子どもたちと一緒に夏にキャンプに行くというのが、私の非常に楽しい事業となっています。NPOの設立、その前のきっかけ、今やっていることを少しお話させていただきました。

**伊東** ありがとうございます。公民館での学びが、今、NPOを設立し、運営することに結びついたと言っただけでは、ちょっと大袈裟かもしれませんが、その辺りはどうでしょうか。公民館での学びというのは、現在の法人の中での活動にも、何か影響を与えているのではないのでしょうか？ 野村さん自身は、どのようにお考えですか？

**野村** もちろん、公民館での学びというのは、非常に大きかったと思っています。その前にきっかけとなったのは、当然、小学校での取り組みです。小学校での取り組みに影響を受け、そして公民館での学びがあって、それがNPOにつながっていったということは、当然大きいと思います。もちろんNPOとしてこの社会教育的な事業をやっているところでは、公民館だけではないところがあります。影響を受けた所は、そこだけではないですけど、当時を振り返ってみると、今、こんなことを言っているのか、という感じはしますが、公民館に物足りなさを感じたというのも、正直なところでは、公民館では、例えば子ども対象の事業や環境教育的な事業が、当時あまり行われなくなりつつある、そんな時代だった。職員の問題であったり、いろいろなことがあったと思うのですが、ちょっと物足りなくなると、自分たち

で、もっとやらないといけないのではないかと思いますところの一つあります。NPOとして環境教育というものを自分たちの手でやらなければいけないというふうに。また、それまでたくさんの大人の方からたくさんのことを教えていただいたことがありましたので、これからは自分たちが地域のため、子どもたちのためにやれることをやれないか、と思ったのです。

**伊東** ありがとうございます。まだまだいろいろな話があると思いますが、次に、加藤さんからご自身の体験、現在に至るまでを少し、お話いただければと思います。よろしくお願いいたします。

**加藤** この会場に入る前に、ロビーに展示してある資料を見せていただきました。その一つに「婦人学級」とありました。今、私は「女性」と一応呼ばれていますが、「婦人」ではないな、という感覚の中で生きています。「婦人」という言葉に40年という歳月を感じています。

現在は保育室併設講座という事業だと思いますが、私は「幼児室に行ってくるね」と家を出ていた記憶があります。やはり資料を見たら、「幼児室」とあったので、親が講座を受ける間の保育ではなくて、子ども自身も「幼児室」に行くというか、それが公民館、子ども自身も公民館活動をしているということが、今よりも顕著だったのかなという印象を、正しいかどうかはちょっとわかりませんが、受けました。

今日一番言いたかったことなのですが、白梅分館で講座を受けた後に、松林分館の講座も受けに行くことになりました。そこでの松林の職員さんとの出会いが、私の子育てにはとても大きな影響を与えることになりました。その時に職員さんから「子どもは自分のお腹から生まれてくるかもしれないけど、自分の持ち物ではない。どんなに小さくてもちゃんと一人の人格を持っているんだよ」というような、すごくざっくりとした印象的な言葉しか覚えてないのですが、そのときに私は

すごく衝撃を受けて、自分は間違っていたなと感じました。「目からうろこ」という感じで、私が一応、子育てを間違わず、まあ、他人様から見たら、間違っているかもしれませんが、曲がりなりにも二人の息子を社会人として社会に送り出したのは、その職員さんとの関わりが非常に大きかったと思いますし、公民館という所がその職員さんと私をつないでくれたことに、今でも深く感謝しています。

その頃、その職員さんから「公民館は学ぶ所だよ」、「公民館は学ぶ所だよ」と、松林分館に行くたびに声をかけられていたのです。今、「公民館は学ぶ所」という意識を持って公民館に来ている人はどれくらいいるのだろうか、というように思うようになりました。時代の流れと共に、利用者の中のニーズも変わるでしょうし、世の中も変わっている中で、「公民館は学びの場」という感覚が薄れていくのはしょうがないのか、もう一度利用者の皆さんにその辺を喚起する必要があるのかなと、40周年のこのシンポジウムに参加するにあたって考えました。

その幼児室付きの講座を受けた後、先ほどお話ししたように、しばらく公民館から離れていましたが、2001年、平成13年、先ほどお話ししたコール福生21の一員として、本格的に公民館でのサークル活動を始めることになりました。このコール福生21というサークルは、聞くところによると、ベートーヴェンの「第九」を福生市で大々的にやった時に、ぜひ福生に混声合唱を根付かせたい、という思いから有志が集まって作ったサークルだったそうです。長い年月を経まして、現在、設立当時から在籍しているメンバーは、残念ながら二人しかいなくなってしまいました。皆さん、高齢化と共にお辞めになったり、人の出入りは仕方ないと思いますが、元気に、「その想いだけは引き継いで頑張っていこうね」と活動しているところで。私が入った頃も、すごく人数が減って困って

いる状況だったようで、指導者の方をお願いする余裕もなかった大変な時期だったようです。そこで公民館の講師派遣援助事業などを使って、いろいろな人にお誘いの声をかけるような努力をした時期もありました。そこで少し盛り上がるというか、人数も増えて、また現在、昨年暮れにバタバタと2、3人辞められて、今ちょっと、大変な状況にあります。「頑張ってる声をかけていこうね」とみんなで話しているところです。興味を持った方は詳細をお知らせしますので、後ほどお声掛けください。

本格的にコール福生21に入ってから、2008年、平成20年に代表をお引き受けして、それから1期2年の運営委員（本館利用者連絡会）を気付いたら3期も務めていました。でも、この6年間で公民館について非常にいい勉強をさせていただきました。人に伝えるためには調べなくてはならないし、学ばなくてはならないので……。それから人とのつながり、非常に大きなものを得られたと思います。そして、会則を作ったり、構成図を作ったり、忙しかったけれど、今思うと「すごく楽しかったな」と思える時間を過ごしました。ここに山西さんがいらっしゃいますが、最近、人から「山西さんと仲良いのね」と言われて、「えっ、文春に追われちゃうと困る」とか思ったのですが（笑）、そう言われればやはり、考えてみると、議論をしたり、一つの問題を解決しようとして話し合ったり、同じ時間を過ごしたりということが、お互いに気兼ねなくなんでも言える関係を作ってくれたのではないかという思いに至りました。

その6年間に会った人は、本当にリーダーシップを取れる人が多かったのだと思っています。そのおかげで運営委員会も充実していたし、私自身もすごく充実した時間を過ごすことができたと思っています。

コール福生21から利用者連絡会に最初に出た頃には、私が出ないと「ロッカー借りられなくな

っちゃうから、しょうがないから、利用者連絡会、私、出なくちゃ」という感覚で出始めたのです。でも、運営委員を6年間引き受けたことによって、いや、それではいけない。いろいろな人が運営委員になったり、利用者連絡会に顔を出したりすることで、公民館のことを知り、「公民館は学ぶ場所」ということを知り、それから、自分が全て引き受けてやっていくのではなくて、みんなと話し合いながらいろいろなことを決めて、本当に公民館って自由に発言できて、自由な場所なのです。こんなに自由に発言できる場所は無いな、とすごく思っています。そして、みんなを巻き込んで一つの方向に向かっていくのが公民館ではないか、というところに思いが至っています。

**伊東** ありがとうございます。女声コーラスに関心のある方、ぜひ、終わってから……

**加藤** 混声合唱団。

**伊東** あ、混声合唱、ごめんなさい。ぜひ、加藤さんの所をお願いします。今、加藤さんの中で、公民館は学びの場であり、交流し合う場であり、ほかの方々とのつながる場であるという実感があるということでしたが、これは現在の加藤さんにとってもすごく大きいということでしょうか？

**加藤** はい。

**伊東** ありがとうございます。人から学ぶ、人に学ぶとも言いますので、公民館は人材が集まっている所だなあということは感じます。次に山西さん、お願いします。

**山西** 加藤さんと仲の良い山西です。（笑）実践報告ということで、お二方から話があった後なので、ちょっとやりにくいところがありますが、私は先ほど言いましたように男声コーラスのサークルに所属し、歌っているわけです。歌をうたっているわけですが、サークルの外に出て活動するということは、今のところやっていません。それはなぜかということ、今、力を蓄えているというところで、その時期が来たら、先生から解禁があるのではな

いかなど、そう思っています。従って、私は最近の交流の場でいくつか気付いた点をご紹介しますと思います。

実は福生市の公民館、すごく頑張っている、そのように思います。いっぱい効果を出しているという風に思っています。要は、一口で言うと凄いなど。サークル数は全部で200くらいだと伺っていますが、去年の11月に「公民館のつどい」という場があり、70名近くの人が集まり、話し合いました。事例として六つのサークルが「自分の所はこうやってるよ」という報告をしてくださったのです。

共通して言える事は、みんな、自分の生き甲斐を感じている。それからやはり社会貢献という意味で、福祉というようなことも考えている。また、自分の健康寿命も考えている。活動形態としては公民館の部屋の中だけでサークル活動をするのではなく、フィールドワークをしたり、いろいろな場所で生き活きと活動をしているということです。私は楽しみ方、あるいは学び方に非常に深みを感じました。このようなことは枚挙にいとまがないのですが、このような例のように、福生市の公民館が、サークルだけをとてもすごい効果を出しているということです。

六つくらいのくくりで申し上げますと、講座での効果、サークルでの効果、まつりでの効果、あるいは交流会での効果、さらにつどいでの効果、研修会での効果です。これらを総じて言いますと、やはり人は集まるのです。確かに少ないということはあるにはあるのですが。それから、地域とつながる。よく社会教育で言われている、地域とつながっているのです。さらに、それぞれ集まった人が、相互に啓発しあい、相互に学んでいる。それから、事業運営している中での問題や課題、これでいいのだろうかということも考えている。それから、もっともっと新しい企画はないだろうか、ということを発掘しようということもあるわけで

す。

そんなことで、私は、福生市はいっぱい効果を生んでいて凄いと思っています。

そこです。もう少し実態を知りたくなって、紐解いてみました。先ほど「つどい」と申しあげましたが、公民館のつどいはすでに36回やっており、毎回記録集が出ています。その中の4年間くらいを片っ端から読んだのです。読むといっても実際は、解釈しながら読むということにして、非常に私も思いがあって読んだのかもしれませんが。そうすると、二つほど気が付いたのです。

一つは「楽しかった」「良かった」「勉強になった」「続けてほしい」「これからもどんどんやろうぜ」という前向きな話がアンケートに出ている。しかし、もうちょっと深く読み解いてみると、サークル活性化の話が出てきます。提案や抱える課題、これも出てきています。出てきたことをもっとやってみようという前向きです。記録にはなんとそう書いてあります。

しかしながら、せっかく出てきたこの良い方向、これからどうしようかという方向、これを実践に活かす行動につながっていない。その場ではそう思うのだけれど、日常に帰るとそうならない。こういう事がわかりました。やはり、出された次につながることは、その場限りにしないで「棚卸し」していく必要があるのかなと思いました。棚卸しというのは、優先順位や重軽の判断をして、やるかやらないか、見送るのか、あるいはやめるのか、といった判断をするという、そういう棚卸しだと思います。そういうエネルギーがこれからは必要だと思います。

さらにもう少し読むと、実は利用者はそういうことに気が付いているのです。今、私が言うまでもなく。そして、どうしようかと悩んでいる。おそらく職員の方もそうだと思います。どんなことを悩んでいるかということ、自分のお膝元のサークルの運営の悩みですとか、さっき話が出ていまし

たけれど、会員が減るとか、あるいは高齢化して辞めていくとか、自分本位の人が多いとか、コミュニケーションの場が無いとか、こんなことがあるわけです。あと、役員のなり手がいない。

私は、先ほど「人は集まる」と言ったのですが、交流の場には本当はもう少し集まって欲しいのです。あるいは楽しくない場もあるのですね。ちょっと時代遅れかなということもテーマにあります。このように、広がりがかちょっとどうか、というところがあります。

もう一点は、事業企画面での問題です。地域課題というものに、いまいち取り組んでいないのではないだろうか。社会教育法上、公民館は地域の学びの拠点です。地域の課題を取り上げているのだろうか、あるいは地域貢献はこれでいいのだろうか。先ほど私は地域とつながっていると言ったのですが、「もうちょっとやらなきゃ、いかなのじゃないかな」というわけです。野澤さんがよく言われていますが、市民協働、要は、職員だけが一生懸命走るのではなく、「利用者と一緒に、市民と一緒に走るんだ」ということ。こんなことにみんな、悩んでいるわけです。偉そうにこんなこと言いましたが、「じゃあ、お前の答えはどうなんだ？」と聞かれても明確に出てこないです。せいぜい、いろいろな事業をもっとおもしろくする、というくらいかなと思います。おもしろくするには、いろいろな意識や工夫や仕掛けが要ると思います。これを解決するための仕事は、やはり市民と言いますか利用者、それとご苦労なさっている職員の方とのコラボでしょう。簡単にこう言っていますが、利用者、職員の両方の宿題だと思っています。

**伊東** ありがとうございました。楽しい、良かったという話と、利用者は気付いているけれど、その中身をどうしたらいいのか分からない、そういうご指摘をいただいたと思います。山西さんは公民館運営審議会の委員としても活動されています。

事業全体の見直しも含めて、公民館と利用者の在り方みたいなものについて、新たな取り組みが必要だという提案でもあるということでしょうか？

**山西** はい。

**伊東** ありがとうございます。後ほどまた話していただければと思います。

今までの3人の報告を聞いて、野澤さんが感じたこと、設置に至るまでの取り組みと狙い、それから想いみたいなものが今の事例を聞いてどんなものだったのかということ、時間が少ないですが、簡単に感想も含めてお話いただければと思います。

**野澤** やはり、すごい人たちがいて、すごいことを考えて、生きてくださっていて、そういうものが多分、これからの福生というまちの基本になる部分を作っていくてくれるのかな、と感じます。

さっき加藤さんが保育室の話をされていました。当時のことですが、議会で問題にされました。「なんで公民館に保育室が必要なんだ?」、私は「いや、ここは教育機関なんだから、お母さんも勉強する、子どもたちも勉強する、そういう意味で、専門の保母さんがいて子どもたちの面倒を見ていただく、安心してお母さんたちは勉強することができる」という話をしました。

そういった事を含めて、我を通したことがあり、それで異動させられたのだと思います。

お手元の資料について、先ほどあまり説明しなかったので補足いたしますと、社会教育委員さんの答申という形で「社会教育基本構想の中間報告」を教育委員会に出させていただき、それを市の総合計画に組み込んで、市民会館・公民館が出来上がるということになります

皆さんのお話を聞いて、こう思いました。素晴らしい人がいて、そこに影響される。例えば、明治大学の生物学の宮岡一雄先生が、公民館活動を一生懸命やってくださいました。文化財保護審議会委員、社会教育委員、それから公民館運営審議

会委員もやってくださいました。伊東君も野村さんも宮岡先生の影響を受けている。そういう人によって、さまざまな形の影響が広がっていく、そして、次の人がそれを引き継いでいくような、そういうものとして公民館の活動を考えないといけないのではないかと。

だから、ある時期には公民館とは全く離れている時期があったり、それからあるときにはあらためて公民館で勉強をし直したり、ということがいくらかあってもかまわなくて、そういうようなつながりというもの、そのことを非常に大事にしていた方が良くのではないかと思います。

それから、自分でやるということが大事で、人が言ったことをただ後からついていくだけでは、あまり面白くないだろうと思います。そういう意味では、苦労はあるけどそういう中から捕まえるもの、あるいは自分の知識や能力を高めていく。

例えば、野村さんの話で言えば、環境問題というものを考えてみる。福生市の総合計画の分野別計画に環境基本計画がありますが、これは野村さんたちを中心とする、要するにここの公民館で学んだ人たちが作ってくれたようなものです。市長在職中も基本計画、分野別の計画を作らせていただきました。計画づくりの段階から入っていただける市民がいること、これも大変ありがたかったということです。

いずれにしても、長い人生を、行ったり来たりしながらも公民館とのつながりを持っていて、そこで生き甲斐みたいなものを捕まえられればいい。健康寿命も長くなり、お金も少しもかからない。体だけ健康だということは人間絶対あり得ませんから、心の健康みたいなものを作っていくことによって、もしかすると日本の医療問題が解決するかもしれない。介護の問題などもうまくいかかもしれない。そういうようなことを少し申し上げておきます。

**伊東** ありがとうございます。時間があまりあり

ません。これからの公民館について、先ほど、山西さんからご指摘があったように、課題、今までの公民館での成果、これはもう、皆さん一人ひとりがお持ちだと思います。平たく言ってしまえば、学び合う、交流し合う、そして、つながり合った成果として、新たな取り組みにも発展している。これは皆さんの中にあることではないかと思えます。

今、野澤さんがおっしゃったように、人のつながりの大切さを、自分の人生の中で身に付いた時期があると考えていただければ、非常に大きな意味があるということ、今、3人の事例と野澤さんのお話であったと思います。

これからさらに少子高齢化が進む中で作家の村上春樹さんが「空気が薄い時代」と、今の時代を評しています。個々人が孤立、分散し、隣近所とのコミュニケーションも少ない中で、やはり、これから地域の中で起きて来るであろう、また、現在すでに起きているけれど潜在化して見えていないような問題は、たくさんあるのではないかと思います。数値が出ていますが、福生では6%の人が外国人です。となると、隣近所にも外国人の人がいて、普通に生活している状況になっています。この割合は三多摩ではダントツです。こういう特徴的なまちでもある福生で、これから公民館がどうあるべきなのか、ということ、本当に、これを2時間も3時間もしゃべらなきゃいけないかもしれないのですが、わずか3分くらいでそれぞれの方から、これからの公民館、こうあったらいいのではないかと、みたいなことを、今日はヒントを投げかけるという意味でお話していただければと思います。野村さんからお願いできるでしょうか？

**野村** 公民館がこれまで果たしてきた役割や、そこが生み出してきたものの重要性、それらは今、お話を聞いて新たにしたわけですが、一方で今、伊東さんが言われたように、これからの時代の課題、

そういうものを考え合わせていくと、当然限られた人材であったり、限られたお金の中でやっていかなければならない。そうすると、この社会教育施設としての公民館というものは、考えていかなければいけないのではないかと思うところです。もちろん公民館を造った時には造った時の課題があり、どんどん整備をしていかなければいけない時代であったのだと思います。それから40年が経過し、施設も老朽化し、社会状況、福生が抱えている問題が変わってきているところで、これからの公民館はこのままでいいのか？ というと、そうではないだろうと思うのです。

ただ、学び合う、交流し合う、つながり合うという機能はこの先の福生の人を育てる、我々が育っていく中で、どうしても必要な機能であって、今後、どこがそれを担っていくのか？ 公民館という、この「館」という施設、そこがやるべきことなのか？ 今、福生ではコミュニティ・スクールという制度が進んでいるところですが、もしかしたら、こういう所が公民館的な機能というのを持ち得るようになってくるのではないか、というような感じもしています。

でも、そのところは簡単にはいかないとは思っています。学校には学校の事情があったりするでしょうし、学校と社会教育とがもっとつながっていかなくてはいけないということも感じています。

**伊東** ありがとうございます。人材育成機能は公民館で重要な位置を占めるのではないかと。ただ、それもコミュニティ・スクールの仕組みが少し拡大してくるのではないかと、というご指摘をいただきました。加藤さんからお願いします。

**加藤** 先ほど、野澤さんからお話があった通り、高齢化が進む中で、やはり高齢者の居場所としての公民館の役割が大きくなっていくのではないかと、思っています。

最近いろいろな所で「居場所」という言葉を耳にしますが、高齢者ばかりでなく、今、学校に行

けなくなってしまった子どもたちも公民館を居場所として使えるようになればいい、そういう環境を整えたいと、最近、強く思っています。

それともう一つ、公民館を考えたときに、先ほど皆さんからお話いただいたように、福生市の公民館は「市民の手で創り上げた」というところを、これからの利用者、そして現在の利用者でそのことをご存じない方々に伝えていってほしいと思います。伝えていかなければいけないのではないかと、思っているところです。

**伊東** ありがとうございます。やはり、超高齢社会ですので、近いうちに福生市の人口も、約25%が65歳以上の人口になるということは、予測されています。その時に居場所づくりということは非常に重要だと思うのですが、ただ場所を提供すればいいのかという問題でもない。それは、公民館が設置された経緯を考えても、やはり今後どうあるべきか、ということを考える必要がある、ということ、加藤さんにおっしゃっていただきました。山西さん、お願いします。

**山西** これからということで、少し違う切り口で申し上げます。あちらこちらでいくつかの事例を学んできた、勉強してきた話の受け売りみたいなことですが、「地域との関わりをもっともっと」ということかと思っています。

学んだ事例はたくさんありますが、二つほど紹介します。一つは小平市の事例です。小平市は公民館と図書館の複合施設です。レストランもあり、先ほどの居場所と言えば、そういう居場所になっています。ここで特徴的なことは、市民が未来づくり実行委員会を立ち上げて、これから先どうしようか、ということを考えていくのです。それから、たまたまかもしれませんが、大学が近くにあるので、そのデザインのことなどについてもいろいろやっている。あるいは、高校生ともやっている。ということで、公民館事業の企画立案のかなりの部分を市民がやっている。こういう状況を見

てきました。すごいなと思いました。

二つ目は、これは公民館ではないのですが、杉並区立杉並第一小学校です。ここではボランティアという形ですが、小学生に、いわゆる学校支援の立場から、社会の学びというものを教えているのです。そして、教えている人は現役の会社員、商社マン、それから看護師、助産師です。それからデザイナー、大学生。大学生も杉一の卒業生です。

そういう人たちが何をやっているかという、例えば、命の大事さというものを教えています。最近、命を粗末にする事件がたくさん起こっています。子どもの頃からこういうことを教えようとしています。学校の先生がやっているのではなく、ボランティアです。

また、世の中に出たときに生きていけるように、企業家精神を小学生に教えている。現役の働き手ならはだと思えます。その他いろいろあるのですが、そこにはカリスマ的存在の学校支援コーディネーターがいらっしゃいました。その人がいてこそかもしれません。

今、二つの例を申し上げましたが、要は「地域連携が大事だ」ということを強く思っています。

それからもう一つ、公民館の仕事のやり方なのですが、公民館が行政のハブ(HUB)として、福生という地域の問題に関わっていくということが、これからさらに必要ではないかと思っています。これは国立市で学んできたことですが、市役所というのは、俗に縦割りの仕事と言われています。エリアが決まっています、範囲が決まっています。しかし、その中であって公民館は、行政のハブという形で、どこにも関わることができる。要は、公民館がいろいろな市の行政にコミットできるという立場だろうと思います。

そんなことから、社会教育という言い方をしますと、公序良俗に反しない限り、何をやってもいい、ということです。ですから、何を学んでもいい

いわけです。ちょっと話ができませんでした、福生市の総合計画の中の25の目標に対して、施策が50個もあります。そのうち、私たちが見たところ、21個は公民館がさわれるのです。そういう仲立ちを公民館が行い、例えば、講座の企画に生かすというようなことをすると、まさに行政のハブの機能が果たせるのではないかと思っています。

**伊東** ありがとうございます。残りが3分くらいになってしまいました。本来であれば野澤さんにまとめをお話いただこうと思っていたのですが、時間が無く、大変申し訳ありません。

実は、今、皆さんのお話の中で、課題も整理されつつあるし、課題を整理するというよりも、課題があるということもわかってきています。それは超少子高齢社会の中でもあるし、それからコミュニティがやや薄い感じになっているということもある。今までの公民館での学びを少し考えてみますと、学ぶ、学び合う、交流し合う、それから文化を創造すると言うとちょっと大袈裟かもしれませんが、つながり合うことで新たな文化を生み出してきた、という事実がある。そのことは皆さんが体験してきたことだと思います。

この中では、学び合うことで、個人々人としての発達が、実は多々あったと思います。ご来場の皆さんもそのことを実感している方が多いのではないのでしょうか。では、今後はどうなのだろうか？といったときに、地域での生活空間を考えた学びが展開していくような取り組みが必要ではないかと思っています。それにはやはり、知恵を集めること、そして、山西さんからは地域とのつながりをもっともっと深めていけないといけない、という話をさせていただきました。これは地域での知恵を集めるってということだと思います。

それから、冒頭、話をしましたが、昭和48年の5月31日だったと思いますが、「ふっさ公民館を創る市民の会」が設立されました。その中で、やはり最終的には自分たちの思い、それから住民の

合意というのを行動に移すということが重要だということが語られていたと思います。知恵を集め、合意を形成した上で、行政の決議機関である議会を通して、住民の思いを政策として提案し、行動に移すということだと思います。これにより地域も変わる、個人が変わることによって地域が変わる、先ほど、野澤さんからご指摘いただいたように、人とのつながりが自らを変え、自ら変わった人が、また、新たな人を変えていく、というつながりではないかと思います。

この意味で、参加と協働という言葉が出てくるのではないかと思います。ですから、一人ひとりの住民、利用者が、公民館または地域の活動に参加して、手間と時間はかかりますが、協働の取り組みをする。時として協働という言葉を使うと、負担と我慢ということを要求されているようなケースも考えられますが、そうではなく、やはり一人ひとりが対等な立場で、または野村さんが言うように、NPO とまたは民間企業と、それから研究機関や新たな行政機関、大学と協働して、対等な立場で、話を始める。そこから新たな合意を形成して福生で実現していこうではないか、ということになっていくのではないのでしょうか。こういうモデルが考えられつつあるのですが、それを担うのは公民館の利用者、皆さん方ということになります。

また、それを支えるのは行政の役割であり、予算が限られている中で、本当に住民にとって重要なもののかたち作っていくという取り組みにこれからシフトしていくのではないかと、思います。

時間が無くなってしまって申し訳ないですが、今日は、40年間公民館活動をされてきた方、40年とはいわなくても十数年、福生の公民館に関わってきた方々、そして、このフロアの中にも、公民館を創る活動に関わった方、今までも、これからも、支援していただける方々に集まっていたいただきシンポジウムが開催できました。

フロアから意見をいただきたい方が、何人もいらっしゃいました。これまでの公民館を支えていただいた方や貴重なご意見をお持ちの方がたくさんお見えになっています。本当は時間を割いて、発言していただきたいと思っていたのですが、コーディネーターとしての力量がちょっと少なくて申し訳ありません。ただ、これからの公民館の利用者交流会、利用者研修会等で、皆さんと話し合う機会があると思いますので、ぜひ、今日をきっかけに、話題を深めて学習していただければ、と思います。

ご参加いただいた皆さん、本当にありがとうございました。時間を割いて、このコーディネーターに付き合っていたいた、野澤さん、加藤さん、野村さん、山西さん、本当にどうもありがとうございました。それでは司会の小澤さんにマイクをお返ししたいと思います。よろしくお願ひします。ありがとうございました。

小澤 登壇者の皆様、

ありがとうございました。

とても聴きごたえのあるシンポジウムでした。福生の公民館は役所が作って



られたものではなかったのですね。公民館を創るために、多くの方々が、ものすごい学びと熱意をもって奔走されたということに胸が熱くなる思いをしました。

私も加藤さんのように、託児付講座に参加をし、育児休業中だったものですから、社会とのつながりを取り戻したような気持ちになりました。その後も公民館に子どもを連れて行きますと、山西さんや伊東さんをはじめ、いろいろな方に可愛がってもらいます。おかげでうちの子には、ジージヤバーバがたくさんいます。これからうちの子も公民館を通して学びを深め、ゆくゆくは野村さんみ

たいに自分で仕事を興せるようになってもらいたいと思ったりもしますし、それが発展して、野澤さんみたいに市長に……なることはないと思いますが、とにかく、こういう公民館が、自分が住むまちにあって、本当に良かったと思いました。

ただ、どんなに素晴らしい建物、どんなに素晴らしい機能も、使わなければ廃れていってしまいます。これからはサークルだけとか講座だけとかではなく、もっと流動的にいろいろな形で、たくさんの方が細く長くでも公民館に関わっていけるようにしていければいいと思いました。

今日は、熱い議論を交わしていただきました。登壇者の皆様に、今一度、大きな拍手をお送りください。

以上をもちまして、福生市公民館開館40周年記念シンポジウムを終了させていただきます。長時間ご参加いただきまして、誠にありがとうございました。

なお、お配りしましたアンケート用紙、筆記用具は、受付にて回収させていただきますので、ご協力をお願いいたします。お帰りの際は、ロビーの資料展示にも、ぜひお立ち寄りください。では、皆様、どうぞお気をつけてお帰りください。本日は誠にありがとうございました。

※シンポジウム当日配布のプログラムから抜粋（A3判見開きを縮小して掲載した。）

## プログラム

### ★ 記念式典

総合司会 小澤 はる奈  
 （福生市公民館運営審議会委員）

環境自治体会議事務局局長（現職）、環境自治体会議環境政策研究所理事（現職）。環境に関する自治体政策をサポートするため専門家として、現在福生市環境マネジメンシステムの(F-e)監査委員を務める。



### ● 開会のあいさつ 公民館長 佐藤 克年

### ● 祝賀演奏 福生吹奏楽団アンサンブル



《曲目》

1. エンターティナー（サクソフォン・アンサンブル）
2. 君の瞳に恋してる（金管アンサンブル）
3. ドレミの歌（金管アンサンブル）



☆福生吹奏楽団プロフィール☆  
 1995年3月に発足。福生市を中心として活動している一般吹奏楽団。  
 団員が市内の中学校における外部指導員として吹奏楽指導にあたるなど、地域に根ざした音楽文化の発展に取り組んでいる。  
 年一回の定期演奏会のほか、年間を通して福生市の各行事や依頼演奏に出演している。

- 主催者挨拶 教育長 川越 孝洋
- 来賓祝辞 市長 加藤 育男
- 市議会議長 杉山 行男

### ★ シンポジウム

福生市公民館は、昭和52年(1977年)に開館し、平成29年6月で40年を迎えました。開設するに至っては、当時の青年や主婦が中心となって始めた「ふっさ公民館を創る市民の会」の活動をはじめ、多くの市民の地道な開設運動の御尽力によるもので、まさに「市民が創った公民館」といえる取り組みであります。

公民館（福生市には本館・松林分館・白梅分館の3館設置）は、市民の学習を保障する場として、利用者が主体となった「公民館のつどい」などの実行委員会形式の事業、乳幼児から高齢者まで幅広い年代を対象にした主催講座や事業を実施しております。

また、公民館ではサークル活動など市民とともに豊かな学習・文化活動が展開され、多くの市民が地域で活躍されています。

シンポジウムでは、この公民館のあゆみを振り返りつつ、さらなる発展のための方向性を考え合っています。皆さんのこれからの活動のヒントを見つけていきましょう。

## プロフィール

### ◆ コーディネーター ◆

■ 伊東 静一 東京芸芸大学非常勤講師  
 平成19年度(2007年)福生市公民館長(第11代)。  
 平成29年度(2017年)福生市公民館運営審議会委員(現在1期目)。  
 長年にわたる社会教育の実践を通して、また社会教育の研究者としてシンポジウムの議論をコーディネート。



### ◆ パネリスト ◆

■ 野澤 久人 前福生市長・初代公民館長  
 昭和52年度(1977年)福生市公民館長(初代)、平成12年(2000年)福生市長(2期)。  
 福生市公民館設置前の市民の社会教育活動の実態と公民館建設に至った経過について報告。



■ 加藤 孝子 公民館利用者  
 昭和56年度(1981年)福生市公民館白梅分館主催「婦人学級」(保育室併設)に参加。  
 平成27年度(2015年)福生市教育委員(現在2期目)。  
 公民館本館利用者連絡会の運営委員、公民館サークル「コール福生21」(合唱)での活動などからの報告。



■ 野村 亮 NPO法人自然環境アカデミー事務局長  
 昭和52年度(1977年)福生市公民館主催講座「自然観察教室」に参加。  
 平成23年度(2011年)福生市社会教育委員(現在4期目)。  
 公民館事業への協力、社会教育委員の会議議長、またNPO法人設立後、市内小学校での野鳥観察指導などの今日までの取組や公民館との関わりについて報告。



■ 山西 年男 公民館利用者  
 平成14年度(2002年)福生市公民館主催講座「ふっさ探検マップづくり〜野鳥編」に参加。  
 平成27年度(2015年)福生市公民館運営審議会委員(現在2期目)。  
 公民館本館利用者連絡会の運営委員、公民館運営審議会委員や公民館サークル「福生男声コーラス Brilliante」(合唱)での活動などからの報告。

